

ここに新田寂慶雲博永信士こと故深谷博之殿、昭和十一年三月二十二日、富山県は高岡市に深谷隆一郎、のぶ夫妻の長子として生を受く。

父上は富山大学の教授とか。故を以て故人も富山大学に進みたるものなり。

かの青春時代、いくつかの紆余曲折、また幾つかの職業を転々とす。

やがて昭和三十八年、故人三十才の頃上京、三鷹に住まいて新聞販売の道に進みたるものらし。

この頃、知人の紹介ありて、神奈川の人、信子殿と出逢い結婚、のち家に一男二女を挙ぐ。

昭和四十五年、当八王子に至り独立、朝日新聞販売所を散田町に開業す。

爾来、妻の為、子らの為にと働きに働きたる年月あり。

やがて朝日新聞八王子南販売所を当市片倉町にかまえて、二店、盛時には従業員四十名なる大世帯にまで発展、大いに隆盛をみたるものなり。また朝日新聞販売所多摩南部朝日会会長として、支部発展に尽くしたる功績、誠に大なるものあり。

故人、その資性剛直、誠に正義感強き人なり。また子ら育むにあたりても、人たるものの在り方説くなど、なかなか厳しき人にてもあり。

また余技として囲碁を能くし、ケーブルテレビでプロ棋士と対戦、敗れたりとはいえ、あわやという処まで追い詰め、アマチュア強豪の五段、その手筋激賞さ

れしものとか。

またある時、正月に開かれる朝日新聞囲碁将棋合宿に、碁好きで知られ、豪放な棋風で鬼才とうたわれし升田幸三第四世将棋名人と、長時間に亘り親しげに碁盤かこみたることもあるとか。おそらくはその棋風あい似たるところあればならん。

人生中道、自ら思うが如くに生き来たりて、愛子らもそれぞれに成長、六十の坂こえしころ、ほっと安堵したるか、いささかに四大乱すことあり。一家これを案じて一日も早き快癒願うといえども能わざりき。

平成十六年に至り、販売店を後進に譲りてリタイヤせしものなり。

愛妻・愛子らの想いあるといえども、宿痾徐々にその身を冒したるものらし。去年は七月、杉並赤十字病院にて六時間に亘る大手術受け、その後一時は快方向かうとみえて空しく、医師の申されしは余命わずかとのこと。

さればその数ヶ月を家族に囲まれて暮らさんとし、家に医療用ベッドを備え、妻信子殿は以前にも増して介護に励み、長女京香殿、長男一宏殿も能う限りの手だてを尽くす。

毎日の様に「京香か、一宏か」と子らの名前を呼びつつ、ある朝七十五才を一期として恩愛の家に別れを告げ、やすらかにやすかにみまかる。

時にあたりて、故人の来し方に思いをいたせば、富山県は高岡に生まれ、いく

つかの紆余曲折ありてのち、当八王子に至りて天職を見出し、朝日新聞の販売に全力を尽くす。

多摩南部朝日会会長として販売店を束ね、その拡大に功績を積む。

その資性剛直にして、ワンマン、気性激しいえども、巢立ちたる奨学生達、数十人にも及びたるものとか。若き者、弱き者にはそつと手さしのべる人情家にもあり。その陰にこれを支えたる妻の力、並々ならぬ内助の功なり。

妻を愛し、子ら愛おしみたる良き夫、良き親なりき。お母さんがいると楽になるんだなどと妻が傍らに居るを喜び、数日前には夢さまよいて、高岡の昔に戻り、よし子、春江、美津子などと妹達の名前呼びたるとか。人は最期を迎えるにあたりて、懐かしき古き家路たどるものらし。

いくつかの春秋残してのいささか早き別れとはいえ、家族水入らず、幸いなる数ヶ月過ごしての旅立ちなれば、これはこれ大往生といわざるべけんや。